



社会環境の変化対応は冷静な判断を

ジャーナリスト 海部隆太郎

今夏、北にある有名な動物園を訪ねた。ペンギン館で聞いたベテラン飼育員の話がとても興味深く、社会環境がいかに生き方を変えるのかを知る機会になった。ペンギンの夏は、つがい交代で卵を温めふ化させる子育ての季節。したがって厳密な一夫一妻制という説明だった。そこでメスに好まれるオスペンギンの特徴を聞いてみた。

「自然界では餌を多くとる、たくましいオスにメスは近寄る。だが、何もせずに餌がもらえる動物園では、ひ弱な母性本能をくすぐるようなオスがモテている」とのこと。さらに、そのオスペンギンに何匹ものメスが恋をし、結果としていくつもの有精卵が誕生してしまう。ただし、オスは1匹のメスとつがいになるので、ふ化放棄の卵が複数出てしまうそうだ。

想いを遂げられなかったメスは独身を貫くので、必然的にオスが余る。それがどうなるかといえば、オス同士でつがいになる現象が起きるのだという。飼育員は、そのオスのつがいの寝床に気づかれないように行き場のない卵を置くと、なんと交代で卵を温め始め、無事にペンギンの赤ちゃんが生まれる。

自然界にはない現象が、動物園という人工的な社会で起きる。食べ物に困らない、豊かな社会になり、生き物はその社会に見事に適応する。メスが好

むオスの姿が変化し、オス同士のつがいができるなど驚きだが、冷静に考えれば分らないこともない。人間社会も同じ現象があるから。

横並びでは無理な働き方改革

話を日本の社会環境の変化に置き換えてみたい。私が社会人になった時と比較すると利便性は大幅に増した。出先から人が運んでいた原稿は、FAXが登場、今はインターネットメールになった。出先からの連絡は公衆電話から携帯電話へ激変し、時間は大幅に節約できた。ただ、その分だけ余計な仕事が増えたと思えなかった。不思議に思わず、日々続けている仕事の何割かは、10年前にはなかったのではな

いか。気が付かないうちに余計な仕事を作り出してしまっていないだろうか。日本の人口構造の変化を今さら指摘するまでもないが、いよいよ本格化する少子高齢社会。その対応策として打ち出されている働き方改革や多様性への取り組みは、まさに社会環境への変化の対応策だ。これまでの変化で無意識に増やした仕事を大胆に捨てなくてはいけない。さらに意識的に多様性を受け入れていく必要がある。

その取り組みは一律ではなく、百社百通りでやらなければ無理が出るだろう。横並びが得意な日本型では、うまくいかないと感じる。だからこそ、そこに冷静な判断が求められる。動物園のペンギン社会よりは複雑な社会だからだ。

《筆者紹介》

海部隆太郎（かいべりゅうたろう）
法政大学卒。日本工業新聞社、IT企業を経て独立。中小企業を中心に企業が抱える幅広い課題について取材活動を展開する。



さらに詳しくはWEBへ

イータックス

検索



法人会は会社経営の効率化のためにe-Taxの普及を支援しています。